

幼児の音楽リズムの指導

お茶の水女子大学付属幼稚園

三才児の音楽リズム



けて考えることが必要になってくる。

ここでは一応、学期の区切りを単位にと
つて考え方やすさをたててみた。

○第一期

今まで家庭の中で限られた範囲の人たち
としか生活してこなかつた三才児が、幼稚
園という社会集団にはじめて入ってきたと
きには、その当初は程度の差こそあれ、各
人各様の緊張と不安の錯綜した気持でいっ
ぱいである。教師はその緊張と不安を一日
も早くいて、ひとりひとりが園の生活を
心ゆくまで楽しめるよう状態におくこと
を目的として種々の努力と工夫をこらすの
であるが、まず第一に園の生活を今までの
家庭生活とかけ離れたものとせず、できる
だけ近づけたものとするのことを考える。
音楽リズムの面でもはじめは、今まで家
庭生活とかけ離れたものとせず、できる
だけ近づけたものとするのことを考える。
音楽リズムもまた広い意味での幼児の遊びの
中にあり、その一分野として扱っていくこ
とが大切である。そこで、三才児の音楽リ
ズムについて考える場合、三才児の心身の
生長発達とか、四季の出来事とかと結びつ
はり幼児の前に出たときには音楽リズムと
したがつて、音楽リズムもまた、それ自
体独自の性格をもつことを認めつつも、や
がてはり幼児の前に出たときには音楽リズムと

庭にいる間に習いおぼえたうたをうたつたり、親しみなじんだ曲を選択してリズム遊びに入つていったりする。これは音楽リズムを楽しむ動機づけをするというか、糸口をつくるというか、そういうことでもあるが、むしろ園の生活全体を樂しくする、適応を容易にするという大きな意味が背景に考えられている。

そのため教師は、三才児一般としての身体の発育、リズム運動機能の発達がどの程度にあるかとか、歌唱指導の際の音域なども知つておくことが必要であるが、まず自分の受けもつた幼児ひとりひとりが日ごろどんな歌を好んでうたい、どんな遊びをしているなどを調査しておくことも忘れてはならない。ある子どもはすでにある種の生活環境から、たとえば年令の近いきょうだいがあることなどによって、これから園でとり扱っていくであろう歌や曲などを充分知つていてもしれないし、ある子どもはテレビからコマーシャル・ソングやテーマ・ミュージックなどを覚えているかも

しない。また、反対にある子どもは歌はまだ何も知らないかもしれない。また生得のリズム感・運動神経のよさのある子どももあれば、むしろマイナスの条件のある子どももあるかもしれない。これらをすべて白紙、均等とみなして、音楽リズムをとりおこなっていくことは教師として不用意である。教師は三才児の個人個人の興味と関心のありかを知り、またその程度の深浅さを知ることを研究しなければならない。

具体的な材料について考えると、入園当初には幼児になじみ深い曲、たとえば「おててつないで」、「チャーリップ」、「むすんでひらいて」などが、うたうことにも、マチで歩く場合にも、リズム表現をする場合にもとりあげられてくるであろう。そしてだんだん遊びが活発におこなわれるようになりだしたら、遊びにつながる題材で、汽車ごっこか積木あそびなどの歌や曲なども新らしくとり入れられていくてよいし、

いつてよいであろう。とにかく、この第一期は何よりも無理なく導入し、子どもの興味につながつたものを材料としていくことが大切である。

○第二期

第一期は三才児は集団への適応がとかくおこなわれにくく、脱線することが保育場面でしばしば生ずる。音楽リズムの場合もそうで、内客はどこまでも個々の興味の存在を重視するにしても、形はやはり幼稚園の場ではクラス単位で音楽リズムをおこなうことが多いのが現実である。その場合も遊戯室という場所に対しても、形はやはり幼稚園の場ではクラス単位で音楽リズムをおこなうこと多いが現実である。その場合も子どももいるし、みなでいっしょにすることをしぶる子どももいる。しかし、教師の苦心とか、保育経験からの慣れなどによってだんだんと解決し、第二期になると特別な場合を除いては、ほとんどの子どもは喜んでリズム遊びに参加し、新らしい歌なども積極的な態度でおぼえようとする。いわゆる保育の軌道にのつた状態が見られるので

ある。

第二期は長く、そして生活する巾が広い。園の大きな行事としての運動会にもその一員として三才児は元気に参加するし、遠足があれば、リズム遊びを通してまた遠足^ひっこをしてその喜びをたがいに倍増しあう。「秋の山にみんなで汽車ボッボに乗つて行きました。汽車はトンネルをくぐつたり、坂道をガッタンコ、ガッタソコと上つたりしてお山につきました。お山からはうきぎさんも小鳥さんもたぬきさんも、みなさんよくいらっしゃいましたねつてお迎えに来てくれたのですつて……」教師のひきだす話とピアノで三才児の夢は、いろとりどりの秋の山にと果てしもなく広がっていく。

この頃になるとある一連の主題の下でのリズム遊びはかなり長く興味の持続がみられる。これは生活の一部としてリズム遊びを考える場合に種々な主題がとりあげられるし、音楽リズムを通して子どもの情操をより深く高く伸ばしていくことができる。

また友だちとの協同動作も次第にできるようになるので、二人組などとする、動作の三つ位までの簡単なフォーカダンスなどをとり入れると楽しみも非常に増す。そして友だち意識という社会性発達の一面向からもこういふたりズム指導のあり方も必要であろう。

○第三期

これは三才児としての充実期でもあり、さらに四才児となるための下地をつくる時期である。

第三期はとかく冬の寒さにとじ込められがちだが、こんな折にこそ室内保育を中心としたりの秋の山にと果てしもなく広がつ

ていく。

この頃になるとある一連の主題の下でのリズム遊びはかなり長く興味の持続がみられる。これは子どもの創造性を伸ばす基礎となるものである。また、音楽リズムの鑑賞といふことを思い切つてたくさんやらせたい。

また第三期になると、ふだんの遊びの中でもごつこあそびがかなり複雑さをましていくものである。今までの経験をもとに幼稚園ごっこをしたり、劇あそびや人形芝居あそびのまねごとも子ども同志でやりはじめるが、これをただ見ていたのでは子どもだけではあまり発展性もなく終ってしま

な曲や歌などをコードで聞いて楽しんだりすることも回数多くとり入れたい。そして聞く態度を養うことから、音の強弱とか速度などにもだんだんと幼児なりの程度でわかるように指導していくことが必要であるし、このためには楽器をとり扱うときにも、たんに遊びとして好き勝手にたたくことから、その曲のもつアクセントなり、美しさなりをわざかなりとも気づいていくよう方向づけをすることが大切である。また、基礎動作というものは系統的に扱わなければならぬものであるから、その第一段階として、曲に合わせて歩くこと、走ること、とぶことなどを一つずつ身についてくまで楽しむために、音楽リズムに工夫をこらしたい。まず曲をきいて自由に表現することを思い切つてたくさんやらせたい。

また第三期になると、ふだんの遊びの中でごつこあそびがかなり複雑さをましていくものである。今までの経験をもとに幼稚園ごっこをしたり、劇あそびや人形芝居あそびのまねごとも子ども同志でやりはじめるが、これをただ見ていたのでは子どもだけではあまり発展性もなく終つてしま

う。この場合教師はその遊び仲間の一員として入れてもらい、順番がきたり、小さな先生に指名されたら喜んで歌をうたおう。また、小鳥ごっこの小鳥のときは小さな羽で元気に飛ぶし、わしにあてられたら今度は大きな羽を作つて飛びまわる。ありの一族の遊びなら、ありの表現をしながら積木の荷物をもつて、ヨイショ、ヨイショと運ぶこともしよう。教師もふだんの遊びの中で、子どもの仲間になつて大いに表現しよう。そして子どもに刺激を与えるよう。また、ある場合には子どもがそれぞれ人形芝居の人形を手にはめながらも、三才児のとぼしい経験からだけでは、さて今度はどうやって遊ぼうかととまどつてしまふこともある。そんなとき教師は場にふさわしい曲をひいたりすると、あそびは一段と発展し、

活気に満ちてきて楽しいものとなる。

三才児は何をする場合でも生活の流れを区切らないで、一連のものとしてそこに教師の計画・意図をもりこみ、子どもを充分に活動させることが大切である。このよう

に、遊びの中にリズム表現をとりあげたり、音楽を流したりするとき、自然にふんいきにひたつていくことができるのである。

○むすび

最後にそのとり扱い方について、よく簡単にふれてみる。

材料の選択という面で、子どもの興味につながったものを選ぶことの必要性はくり返し述べたが、そのあり方は次から次へと新らしい曲や歌などを追いまわすよりも、簡単なものを変化をつけながら数多くくり返しおこなつて、充分に子どものものとして消化させることが大切である。そして樂

器の指導でも、歌唱指導でも、リズム遊びの場合でも、いずれの場合においても、技術面の指導を重視することなく、どこまでも「みんながいっしょに楽しくする」ということを第一義としなければならない。



富 樅 純 子

幼児の音楽リズム指導の目標について、
「幼児にいろいろの音楽的経験を与え、美

しい心情を養い、幼児の生活を豊かにす
る。」と「幼稚園のための音楽リズム指導

書(文部省)の中にあげられている。

この目標に沿つての幼稚園における音楽リズムの実際の指導および三才児の実際の様子などについてのべていきたいと思う。

私の受け持つた組は、三才児十七名で、そのうち男児八名、女児九名で、四月から七月までに生まれた子どもであった。

まず三才児の音楽リズムについて、具体的な指導のねらいを次のように考えた。

○楽しい音楽リズムの教育をする。

○のびのびとした楽しいふんいきの中で、ひとりひとりの創造性を培い伸ばすよう

にする。
○音楽への興味関心を深めるために、機会を多く持たせるようとする。

○子どもたちの自発的な自由な動きを尊重し、三才児に適した選択した素材を系統的に与えるようにする。

次に、入園当初の頃の様子から、日誌や記録などで拾つてみよう。

○入園の頃および第一保育期

入園前に家庭でどんな歌を歌っていたかを調査したところによると、おでてつないで、おうまのおやこ、どんぐりころころ、チューリップ、むさんでひらいて、其の他の童謡、歌のおばさんの歌う歌、テレビのコマーシャルの歌などということであつた。家庭生活からスムースに幼稚園への生活に入るため、また特に年令も幼いので

その点も考え、幼稚園で最初に扱う歌は、子どもたちが日頃から知っている歌の中から選んで使うようにした。先生が歌つてきかせ、子どもたちもいつしょに歌つたり、音楽をきいたりして、自然にそのリズムが子どもに反応して体を動かし音楽にのれるよう気をつけた。

入園式の日には、年長組の歌や楽器などをきいたり、リズムを見るという経験をしたが、其の後も初めのうちは、年長組のリズムを見せてもらつたり、或る時は年長組の友だちにいっしょに手をつないで歩いてもらつたり、船や自動車其の他の乗物などにのせてもらつたり、或いは、花をつく

つているところにちょうどやはぢなどになつてとんで来てもらい、いつしょに遊びなどの機会を持った。

入園当初リズムに全然参加しない子どもは男児三名いた。ここでリズムに参加しないひとりAは母親は音楽好きであるが、家庭を祖母が支配していてラジオなどでも音楽になると何時もうるさいと言つて音楽を殆んどきかないという環境に育つたせいか幼稚園で音楽がきこえると、両手で耳を押さえているか、ピアノの側に来ていたずらをして、しきりにピアノをひかせないようになるという状態であった。幼稚園での他の生活の面から見てもAの性格は、友だちとやや協調出来ない様子が見えた。Bは父親が仕事の関係で家庭にいることが多く、音楽をきくという経験が少ない様子であった。Cは病氣のため、みんなより幼稚園におくれて出て来たとしう氣おくれのためにリズムにも参加しないように見受けられた。入園前の家庭での環境が大切なことは、音

樂のことだけに限られたことではないが、A・Bの二人の様子を見て、音樂に親しむ機会の少ない環境に育つた子どもの問題をあらためて強く感じた。

リズムに参加しない子どもの指導は、無理にさせようとしないで、自然に気持をほぐして興味を持つよう仕向けた。家庭とも連絡をとり、家庭でも音樂に親しむ機会を設けてもらうようにしたり、幼稚園での他の集団生活の面や、友だとの遊びの中でも、友だちといっしょにする楽しげが、だんだんに解るように気付けていった。三人がリズムに参加するようになったきっかけは三人三様であった。入園後三週間目の或る日、年長組のリズムをみせてもらつてから、いつしょに中に入れて遊んでもらう機会があつた。この時、Bは大きい組の友だちが楽しそうにしているリズムのふんいきを感じてか、大きい組の方の無理でない誘いに、始めてにこにこして、でも少し恥ずかしそうにして手を引かれて歩いていった。ちょっと私の方を見ていた

が、Bの性質を考え、わざと見ない様子をしていた。その時がきつかけになり、那次からは組の友だちだけでも、いつしょにするようになった。いつしょにしたのでほめると、とても嬉しそうにしていた。Aは音楽リズムの面だけでなく、みんなとお話をきくとか、何かいっしょにするという時に、勝手なことをしていることが多かつた。そしておとなには人一倍認めてもらいたい様子だったので、四月末の或る日、結んで開いての曲を使って、ひとりずつ先生になり皆の前に出てくる機会を持った。順番が来てAはどうかしらと思ったが、集団の中でみんながひとりずつ先生になるといふんいきに促がされてか、ひとりで立つて出て来て皆の前にリズムをした。其の後もときどきリズムに参加したり、途中で止めたり、或いはしなかつたりする時期がしばらく続いたが、五月の中頃より友だちといっしょに出来るようになつた。Cは病氣

なれ、少しは友だちとも遊べるようになつて、安定感を持つてから、と時期を待つた。自由遊びの時にも、先生がいつしょに遊んだり、かごめかごめやあぶくたつたなどの集団遊びにもCをさそつていつしょに遊んだりもした。五月の中頃になり、リズムの時友だちにさそわれ手をつないでもらつて、Cも始めてみんなといっしょに参加した。こんな状態でリズムに参加しなかつた子どもたちも、入園後一月半ぐらいで、みんなといっしょに出来るようになり本当に嬉しかつた。

他の子どもたちの入園当初の頃の音樂リズムの面での様子を見ると、リズムをするのは嬉しいが、ピアノにあわせて動くといふことは少なかつた。先生の方で子どもの動きに合わせてピアノをひいたりもした。歩く時でも勝手にただかけまわるという時を過ごしてから、五月の中頃より音に合わせて動作するよう徐々に指導を始めた。一方自由あそびの中で個人または、二、三人で歌を歌つて遊んでいる場合などは、先

生もいつしょになって歌うとか、出来るだけ機会をみて遊びの中に曲を流すようにも心掛けた。が、今ここに音楽を与えたらいふ時でも、実際にはなかなか実行出来ない場合が多くて残念に思っている。

最初の指導のねらいとしては、みんなといっしょにリズムにのって体を動かして遊ぶことが、楽しいことだということが解るようになつた。年令も幼いので基礎動作などの指導も工夫しておもしろく興味をもつて参加出来るようにし、また環境やふんいきのつくり方などもいろいろ考えことばによる誘導や適当な助言を与えるという点にも留意した。扱う題材や形態にも気を配り、自由に恥ずかしがらずに表現できるように努めた。音楽をきいたり、歌ったり、リズムをしたり樂器あそびをしたりすることは、出来るだけ総合的な面から数多く経験させるように心掛けた。実際に使った題材は、幼児の生活に身近な興味を持っているもので、歌詞の内容はむずかしくなく、ことばがそのまま幼児に理解されるも

ので、音域の広すぎない、リズムは簡単な曲の長さも短いものをくり返し使つた。

ラジオの歌のおばさんはマイクで保育室に毎朝流しているので、自然に遊びながらきたり、口ずさんだり歌いながらきたりした。その他、レコードやテレビ・ラジオなどの音楽を聞く機会を持つたり、またハンドカスターを使って自由に打つ機会もつくつたり、他の教育内容とも関連づけてお話や絵ばなしをきいてそれをリズムで表現したり、動物などのおもんをつけて簡単なリズムあそびに発展させるなどという経験も持たせた。

○第二保育期および第三保育期
引続いて音楽リズムを指導するのにふさわしい環境をつくり、ふんいきをもり立てるように努めていた。今までの指導に加えて歌を歌う時は、楽しく歌うというだけでなく、らくな声でどならず、みんなといっしょに声を揃えて歌うようにするという指導も徐々におこなつた。扱い方もグループ

で歌うとか、ひとりで歌うとか、交互に歌うとかして、人の歌うのをきく経験を持つようにした。第二保育期の終り頃から、楽器もハンドカスターだけでなく鈴をいっしょに使つたり、ハンドカスターとタンパリンを使うなど、二種類の樂器を使って、樂しく遊ぶようにした。自由打ちだけでなく模倣打ちの経験をしたり、初めの四小節をハンドカスター、次の四小節をタンパリンといったように樂器を分けて奏する経験も持たせた。先生の樂隊や、年長組の樂器の合奏をきいたりする機会も設けた。リズムの面でも前より一そう、曲にあわせて自由に表現するようになるため、子どもの表現の中のおもしろい表現や変った表現など、創意工夫が見出された時は取り上げ、みんなに示したり、ほめたりして認めるようにした。興味の少ない子どもの指導には特に気を配り、自信を持たせるように機会をみで個人的にはげましたり、ほめたりして、いろいろ努力し興味を持つよう、あせらず指導するように心掛けた。自由あそびの中で

子どもが即興的にことばにふしをつけて遊んでいる折は、取り上げていっしょに歌うようになり、自然に遊んでいる白雪姫ごっこ・七匹の子山羊ごっこ・小鳥ごっこなど遊びの中に、先生もいっしょに仲間に入れてもらい、子どもたちの遊びの中でリズムが出来ているので、その動きをみてそれにふさわしい適当な音楽を加えて発展させ、より遊びを楽しむように気をつけた。

幸い組の中に音楽リズムが好きな子どもが何人かいて、音楽リズムの機会をきいそくし、目を輝かせ喜んで参加する子どもたちの影響で、他の子どもたちも楽しんで音楽リズムに親しみ参加出来たことは、本当によかつたと思っている。ふりかえって考えてみると、音楽リズムのあり方、環境やふんいきのつくり方指導の面での工夫、素材についてその他、まだまだこれからいろいろと掘りさげ、もつともっと深く研究していくいかなくてはならない問題が多いと思っている。

なお、子どもたちが、これからも幼稚園

でも家庭でも音楽リズムの経験がいっそう充実した楽しいもので満たされ、心身共にされていくことを望んでいます。

発達して音楽的な芽ばえがすくすくと育成されていくことを望んでいます。

四才児の音楽リズム



関治子

た。

迎える側の教師である私としては、四月

のはじめに、次のようなことを考え指導の目標とした。

(1)個人個人の特性をいかして、それを伸ばしていく。
(2)楽しく、自然に音楽リズムを身につけていく。

(1)については、幼児にはそれぞれ本来の性質と、環境による体験から、特性というものを持っている。自然にうたを口ずさむ